

角膜クリニック 第3版

眞鍋禮三, 木下 茂, 大橋裕一, 下村嘉一 監修
西田幸二, 井上幸次, 渡辺 仁, 前田直之 編

『角膜クリニック』は1990年に初版が上梓され、その後、増刷と改訂を重ね今回第3版が発刊され、角膜に関する金字塔と考えています。初版の序文にありますように難治性角膜疾患の治療の臨床をテーマとしての角膜専門外来が起点ですが、臨床医学は病態生理についての知見の集積と構築とがいずれの分野でも必須です。眼表面疾患は“Atlas der Spaltlampenmikroskopie des Lebenden Auges” (A. Vogt, 1842) にみられるように、1842年に角膜内皮像を含む角膜所見が得られていたと感じ入りました。一方で、角膜の透明性を含む病態生理はDM MauriceのLattice theoryなど1960年代の研究が現在の基盤になったと考えています。その後、本書初版にあるように細胞レベルでの病態研究、分子生物学、第2版では遺伝学的研究などの発展が加えられました。第3版の今回は角膜移植や再生医療に関する研究成果に関して改訂されました。

本書の特筆すべきことは上記のごとく、水川孝教授、眞鍋禮三教授、大鳥利文教授らの阪大医学部眼科学講座では単なる角膜の臨床ではなく、その基本となる病態生理の重要性を後進の方々が深く理解し、体得され、第3版では西田幸二教授を筆頭編集者として、51名の執筆者の内容をまとめられたことにあると思います。単著または2、3名での著作は全体を通しての整合性を図ることは容易ですが、多岐にわたる病態、臨床にわたるため多くの方に執筆を依頼せざるを得ず、その分、内容の整合性を図るのは大変であり、編集者のご苦労が多かったと思います。

本書は「正常角膜」で病態生理、「異常角膜所見」でほとんどの角膜疾患が網羅されています。「検査編」では基本的な細隙灯顕微鏡から細菌、遺伝子検査などが記載されています。「治療編」では薬物とその薬理か

ら再生医療まで記載されています。

私自身は常に診療において、症状、所見、鑑別診断、確定診断と進め、患者には診断、原因（解明されていなければその旨、頻度）、治療法（薬物、観血的、治療しない場合も含む）、そしてそれら治療法の予後を説明することとしています。こうしたことで本書を拝読して、「正常角膜」と「検査編」は、日常診療を行ううえでたとえ結膜炎を診察する場合でも、どのような病態、所見であるかを考えつつ診察を行ううえで必読です。「異常角膜所見」と「治療編」は症例に対して診断以降のプロセスでその都度、項目を参考にするのが有益と思いました。

本書の内容とのかかわりですとKeratitis superficialis diffusa (KSD)があります。以前、東大系はSuperficial punctate keratitis (keratopathy) (SPK)、阪大系はKSDと記載しており、東大の三島済一教授からKSDは好ましくないとの指摘があり、2回にわたる角膜カンファランスにおいて海外の文献を基にSPKに統一することとなりました。その際、扱いに苦慮したのがAdenovirus後のThygeson's SPKでした。これは欧米では確立された病態でしたので、SPKとは別にThygeson's SPKと記載することになりました。近年、アデノウイルス角結膜炎の角膜所見に多発性角膜上皮下浸潤との用語が使用される旨の記載がありますが、私には馴染めません。

角膜穿孔もしくは切迫穿孔に対する角膜移植手術療法の記載があります。日本アイバンク協会ではメーリングリストを介して全国のアイバンク（限定登録）の間でこうした緊急に角膜移植を必要とする症例に対する緊急あっせん要請システムを運用しています。緊急要請例の約7割以上に角膜の緊急あっせんが行え

ていることを追記させていただきます。こうした緊急例を生じましたら、地域のアイバンクに連絡をとっていただければと存じます。

阪大医学部眼科学教室が眞鍋教授の薫陶のもと、西田教授にその連綿たる業績が本書に結実し、今後さらに継続されることを祈念申し上げます。

日大名誉教授/公益財団法人 日本アイバンク協会理事長
澤 充

B5・頁 400 2021 年 7 月
定価：本体 20,000 円＋税
[ISBN978-4-260-02043-5] 医学書院刊